



頭書  
大 全  
世 界 國 畫

歐 羅 巴 洲

三

ル 2  
393  
3



東亞

藏書

伊門  
號 393  
卷 3

歐羅巴洲の事  
 歐羅巴の人別ハ二  
 億六千二百萬人と  
 の内十の九ハ白  
 人の種を南の方  
 小の種を南の方  
 黒白相混ト  
 人種も西又北  
 の方魯西亞の領  
 小ハ蒙古人の種  
 残るて顔色白から

歐羅巴洲  
 歐羅巴土地を東西  
 亞小連れは乃堺  
 目以乃東の方  
 小字良留山あり

東亞

ぬものゆき

歐羅巴人種



當時歐羅巴洲中の  
國々大小四十九王  
國もゆき公國もゆ  
て帝國ハ唯魯西亞

出、空良留河末を  
表海少流、甲  
笑、第山の麓、黒  
海越、北中海河  
洲、利加洲、對、

佛蘭西、地、利、の、三  
箇國の、土、留、古、也  
或ハ帝國といふ、  
ともゆき、とも他の  
國ハ、風、信、も、違、  
別、の、お、せ、を、英、吉  
利ハ、王、國、を、ど、も  
格、別、の、強、國、を、其  
政、事、の、行、届、き、國、力  
の、盛、なり、ハ、歐、羅、巴

治部良苗、多、留、の  
滋、戸、過、下、西、ハ、一、面、河  
多、羅、羅、海、河、以、南、北  
一、千、里、東、西、ハ、四、百  
里、内、ハ、一、列、を、四

第一ともいふニ

今の魯西亜帝  
弟二世のききまんども



今の佛蘭西帝  
弟三世のききまんども



今の奥地利帝  
弟三のききまんども



十九の國の大小  
弱し時勢より由り浮  
沈之魯西亜魯  
士奥地利英と佛と  
以て國ハ當時日の出



今の英吉利女王  
ひくろや

當時歐羅巴ハ文明  
開化世界第一として  
相違もりいふとか  
まども往古ハ矢張

の英國北の度家  
以て校を以て大海の  
東より西へと狭た國土  
少くも人民の  
産る以て得る富國強

渾沌無智追々開け  
の進む及でも中  
古ハ封建の世とて  
専ら武と重んじ武  
士の威光烈しくあ  
て町人百姓の難澁  
せしめとも多めを  
しが二三百年以前  
しを學問の道漸く  
行はし人の生計も

兵天の一文の開化の  
中心と名をいふあり  
以て其の人の教の  
行ふ所は徳を修  
免知は并に文學

繁昌はる小徒ハ世  
の人皆智と貴で力  
を恐むと國の政事  
も自然よとの邊小  
基きて次第に今日  
の有様不至し一か  
し今もハ小渾沌無  
知の風俗よや文明  
開化小至すや次  
弟はその趣を頭

技藝を業とす  
郡部以差別あり  
法方ヲ建てる學問の所  
幾多あり其教知は  
彼の産業のあり

たる繪圖を西洋の地理書を寫して示すは左の如く此繪を見て世の中の大槩を知るべし



彼高貴は武備を整へて世界に誇る者なり  
平たは乃源を以て  
一は兵勢を以て



の枝は花に花  
あるは花に花  
善むは本は枝  
急を急を急



○英吉利の本國ハ  
さすで大國なり  
らび九日本國位の  
えのあもども遠方  
小飛地多く五大洲

歩もとと行路共  
一山も西洋の道  
英吉利を佛茶西  
國の北の海掃と難

中興大利亜のりて  
まぐも英吉利の領  
かゆりぞれ處か  
一里四方ありて八  
百萬坪大抵世界の  
廣さの六分一あり  
其廣大魯西亞あり  
劣らば人の廣き領  
か子住ふ人の數一

竹嶋の國首格  
茶河再蘭英倫に  
三心を合衆五  
國の威名輝く一途  
西人氏二千九百萬

億八千三百萬人他  
國無比類か一唯支  
那の人別々及むせ  
るゆゑ  
論頌の外ふも大都  
會の數多し「モい  
るがふらびるそん  
とむ蘇格蘭の都小  
おぢんがらふ阿  
蘭の都はどぶせん

百工技藝牧田畑産  
物遺る所あり中  
は多し鉄石炭蒸  
氣若械の添を申  
る中は奴等も産物  
あり

等何れも繁昌なり  
市中あり



極く勇ましく水を  
渡りし急流舟  
里は波は思ふに陸  
地は走る蒸氣車  
は人小翼の新式



英吉利ハ世界第一  
商賣繁昌の國也  
諸國の船の出入  
して港の賑いさ  
以ふまでもなく國  
中の往来も甚と便  
利あり近來蒸氣船  
ハ珍らしむるも  
ども日本人のい  
ど見ぬ蒸氣車とい

飛より疾は傳信  
機瞬く暇こそ多  
告る急を飛脚  
申す外との新守を  
耳小聞と古傳と

ふものゆきあは  
馬も牛も用ひど  
蒸氣の仕裁おて走  
る車やう其疾さ  
と實お人の目と驚  
か大抵一時小  
十里も走ると東  
海道五十三驛  
ハ一昼夜もて往返  
に包し又傳信機

の都會は中心を延  
武須河畔の論  
府は廣く界を以て  
今東西三千里南北

いふものありあせ  
ハ百里も千里も針  
金を引張てその両  
端お名をきとよせ  
いふものゝ仕掛と  
設け瞬く間お數千  
里の遠方へ相圖つ  
て談話の出来趣  
向より瓦斯と石  
炭と蒸焼おして其

ふり  
百里の間に立たれる  
軒端、柝の音、  
並、鐘を立向、  
地、あ、人、口、  
十、万、生、来、群、集、  
を、立、向、  
を、立、向、  
を、立、向、

氣を引き油燻燭の  
代小用、  
但、此等の仕掛ハ  
英吉利のミカドは  
西洋諸國皆同様  
て人の便利と達  
夜行を、小提燈を  
持、荷物運ぶ  
馬の背と用ひ急  
用の文通を、

成、一、夜、  
六、美、尾、斯、の、燈、火、  
燿、  
人、知、  
馬、車、  
の、音、

草鞋とくし道中  
と駈つるのも  
何事も智慧くらへ  
の世の中を

蒸氣車  
傳信機



四海の浪え音静  
港に輕舟の葉玉乃船  
中遠望は本林林木  
の葉をなみり河  
蒸氣車河に架た鉄

9

英吉利の海軍ハ世  
界第一を軍艦の  
數千艘お遊し領  
の地小備うハ勿論  
始終外國へも出張  
自國の人と守護  
て他の侮を防ぐ故  
ハ世界中交易の行  
場所おハ  
英人の威光最も盛

橋は走る蒸氣車  
矢の如く今朝見  
友は夕暮多里隔る  
旅の急ぐ旅路  
心をな悉く記す

○佛蘭西ハ歐羅巴  
 中の都ともいふべ  
 き真中おて土地も  
 開け一体花美  
 ふう風俗を人の  
 才氣鋭くして學問  
 と勉め發明多し巴  
 理斯の大學校として  
 ハ世界小並に學

ハすくは日と名砂お  
 人論頓別電  
 南半堂宇留の階戸  
 以渡九里修わ  
 少なきは



問所おて大先生方  
 の集り處なり

佛蘭西國西以界  
 西班牙東を白耳  
 義瑞西東西二百六  
 十里南北九二百  
 余里南以方北中

虎留鹿の嶋ハ佛蘭  
西皇帝弟一世カ  
モセンの談生セ  
由来不て評判高  
奈保禮恩ハ身  
介ルヤ人ナリ  
ガ千七百年代の末  
寛政トモ佛蘭西ハ  
大乱起リそのセツ  
用ヒラシテ陸軍の

海峽岩近た痛る鹿  
ルハ地ノ廣大  
魯日西亞ニ次ク帝位  
の國ノ口ニ台七百萬  
其府巴里斯ル人

隊長トナシ生來  
智勇兼備ノ英雄ハ  
年二十六才の時  
伊太里と攻取テ翌  
年ハ地地利ハ勝ラ  
向ハ所天下ハ敵ハ  
千八百四年即チ  
我文化元年佛蘭西  
帝ノ位も即チ威名  
と歐羅巴洲中ハ東

別々唯臨頓ニ及  
市中ル家の義  
業トシテ又中ニ  
好ム名ハ西洋諸  
國ノ類ナリ國ノ



甥小當り弟三世  
がもとんといふ此  
君も英雄の名譽は  
て近來ハ頻ハ海陸  
軍と盛ホ一て歐羅  
巴諸國をかあそと  
恐るといふ  
○西班牙ハ其む  
一強大なる國ホ  
世界中ハ領カも多

大小五箇艘陸の兵士を五  
十萬軍蓋我彼懸  
て進進退の心  
まは西洋一ハ強兵  
と名解一以得

わが國ハ近來ハ衰  
一々學術とも小繁  
昌セテ廣キ國中ハ  
蒸氣車の路も甚ど  
少一元來此國の人  
ハ骨格もよく勇氣  
たゆまぬも兎角物  
事ハ勤る心なく唯  
氣位の高くして  
活計の道と勵まば

理々あり  
佛亞東西ハ西と南  
西班牙國ハ都を  
麻土律産は名  
高き人

頼母一からぬ風信



○葡萄牙も昔日ハ

西班牙の都の景

性質慳し勤心  
昔よりきは稼の道  
小おぼろ玉の産物  
多しとく又の井化  
乃多様取美と佛

盛なり國にて専ら  
航海と勤りて千四  
百九十七年即ち我  
明應六年歐羅巴よ  
喜望峰と廻り印  
度へ渡り道筋を見  
出せしも葡萄牙の  
人己をあてがま  
いふ航海者やを日  
本つ外國人の来を

小較下なる遠敷  
等以下有ん西  
廻れ小葡萄酒田  
楠の河の河口に井  
港里次を急



一ハ天文十一年と  
始とをあるもかん  
てをびんとやいふ  
葡萄牙の人を



國を主任る都なり  
之の風俗盛衰を  
鄰の至こ異あり  
又学枝藝の伝行  
今ハ昔のこりて変

○地中海の口の治  
部良留多留の瀬戸  
一方をせどもあ  
瀬戸の潮の流込  
むのそわて外に出  
つあとかし不思議  
なり場所あり英人  
のち、小臺場を築  
て狭き一方口を守  
る、囊の口を免る

目取 鷲島 入り あり  
里 須 盆 皿 以 港 を 守  
立 庚 子 南 東 一 宗  
出 せ ば 潮 の 流 失 れ 如

其紐を持つが如く



地中海の如く

「治部良苗多留の  
瀬戸の口南北僅六  
七千里の南の何氷利  
加洲北の對する歐羅  
巴の大海の玉環は

うたの外の又九  
太といふ鳴りて  
みも英領あり其  
臺場の洪大ハおぶ  
らうさか小方ど  
英人ハ此二箇所の  
要害と占て地中海  
小威を振へて本  
喉押して背を打つ  
とハみのこやき

部良苗多留の要害  
地中海の喉頭地  
程矢陰小控り築立  
た。砲臺はつあ古不  
動の大盤石喉押し

九太の鳴の景



○獅子里も伊太里の領分なり火山の江土奈山といふ

世界図説巻三

背臥打つ美吉利  
人の権勢を地中  
海に車轉たし忍  
水鹿うぬもあは子  
一瀬戸を廻るは

高さ一萬尺余海よ  
望み見らば一歐  
羅巴の名山を



獅子里嶋  
江土奈山の景

馬里苗嶋東方の  
猿路に屋椰子里越  
て伊右里國細く長  
く多靴し玉の状  
を擬し椰子里嶋ハ

世界図説巻三

十八

伊太里の南の方  
ハ山阪多く北の方  
ハ平地多し氣候  
も南ハ温より北  
北ハ寒し國中の  
人別二千萬人余  
都をふるもんは  
名高き學問所  
元來伊太里ハ舊  
文國にして古代の

靴先以指の度  
ありん國の島  
三百里少く  
河百邊山南ハ海  
突出一町餘程

書画類多しといふ



法王の領分も近來  
ハ大お衰へともど

地味紀元を四町  
天氣快く吹くは春  
の山の色影ふと秋の  
水の聲し山と川との  
越ハ天ハ雲翳の如風

も名所旧跡多くお  
んとべいとさるや  
いへる宮殿八目と  
驚ろも不足を



京北の法衣いやくを  
く山田は殖る桑の苗氏  
の椽を蘭カ人西  
海岸は羅馬飲は至  
所字ぬ空此

○希臘ハ久しく土  
留古の支配とあり  
一が人民その艱苦  
小堪へどして恢復  
と謀る他國の人も  
同情相憐みてあま  
と助け千八百二十  
一年の頃一を数年  
の苦戦して遂に旧  
に獨立國を復した

名所舊跡  
あり  
伊右里國以南より  
東は渡り希羅島  
由來を記す

其國中の人別百三十萬人都の名と安



今ハ風俗衰へ  
昔ハ如椽乃あり  
り此の隣ハ當古  
人情粗シ  
大國ハ口三々二百

○填地利の人口ハ  
三千五百萬人領介



美玉の東西あり  
東を亞細亞を  
飲一布ハ政府を  
歐羅巴已帝ハ威  
権限た有目百

世界地理  
國書卷三

も廣く由来久しき  
帝位の國を古き  
翻譯書を獨逸帝と  
記したるハ即ち填  
地利帝のあとを  
昔日ハ國民の教行  
届き中が洛次第に  
衰へんとする處へ  
近來ハ又頻りに文  
學の世話をして學

友朽まへて海を  
枕を忘風俗知後  
や月しく威徳く  
百多あは生民我  
慄くても孝あり

問所なども多し



○普魯士ハ歐羅巴  
五大國の一にして

土苗吉の北の填地  
利魯佛の並ふ一帝  
國東に瀛く駘八部  
の河以畔乃宇陰奈  
ハ皇帝臨御の大都

世界地理 國書卷三 三十五

七  
國  
三

文武の盛なり  
至るを盡せしむ  
ふ一國中の下人  
水飲百姓不至  
でも字と知らざる  
者なく訓練の歩法  
と知らざる者あり  
去る慶應二寅年  
ハ 壞地利と戦て勝  
利と取る其時敵

會國一出生る産物  
を女穀菓實芋麻葡  
萄金銀銅鉄多し  
と坊々出まはる者  
士國人口一萬八千人

一味の小國てのう  
ふと始め六七箇  
國と滅して其地を  
元來一十八百  
萬の人口増して二  
千二百萬余の數  
上を斯く大戦争  
二日を費したるハ  
僅か五十日であ  
り當時西洋ふ

民以教の行而に貴  
賤男女以差別あり  
女子以知者とな  
し文備て武備起  
る兵士三十一萬人

士  
國  
三  
二  
三



世界万国書卷三

あせと七七日の戦  
と唱へる古と違ひ  
何事も手早くなす  
| 今の世の中あり



智の群多勢之四方  
隣の国と七五

「魔をけりるまあり  
南北方の小國ハ  
宇多夫保留富

○瑞西の都とべり  
んといふ時計細ユ  
の名所あり此國ハ  
山國ふて人皆質素  
儉約且勇氣あり故  
は小國かきども外  
國の輕蔑と受けど



馬和里屋等西北  
岬の禮倍河と乃  
源をるるの山阪  
高き瑞西國の政  
事ハ共和政小

世界万国書卷三

和蘭の人物ハ僅  
小三百六十萬  
諸方一飛地の  
領分多一國の人皆  
藝學と勉り殊小海  
軍ハ此國の得意か  
都とてわけと  
市中奇巖かきど  
も繁花ありは國中  
一の交易場ハハハ

○和蘭の人物ハ僅  
小三百六十萬  
諸方一飛地の  
領分多一國の人皆  
藝學と勉り殊小海  
軍ハ此國の得意か  
都とてわけと  
市中奇巖かきど  
も繁花ありは國中  
一の交易場ハハハ



○白耳義ハ和蘭よ  
を介せたる國か

港あり  
とらだむといふ

此の  
一様  
文  
百  
工技藝云手取老  
他の侮は被り禮  
陰の流北  
乃

河尻以和蘭は至  
中  
山見ぬ  
平地  
河多々小  
患は来此  
人の知  
後乃巧  
諸方

和蘭の人物ハ僅  
小三百六十萬  
諸方一飛地の  
領分多一國の人皆  
藝學と勉り殊小海  
軍ハ此國の得意か  
都とてわけと  
市中奇巖かきど  
も繁花ありは國中  
一の交易場ハハハ

世田  
國書  
卷三

も全体の土地柄  
ハ和蘭より早く  
且國民農業も出精  
して少くも不毛の  
地か一鉄石炭も領  
分中より製造物  
多し小國あれども  
英吉利の風ゆ  
○昔日噠國ハ名高  
き強國にて今小至

築く堤塘田畑の  
業一も精一も花  
の産物少くは諸國  
渡り交易人此  
衣食も饒なり西

るまで諸方ハ飛地  
の領分多し元治元  
子年日耳曼と戦ひ  
見苦しからぬよふ  
防禦したまひも衆  
寡敵せぬ遂に和睦  
して南の塚わらむ  
らん近傍の地を失  
ひ國の人別五十萬  
人と減つてや

隣は白身義は毛  
と和柔の土地を  
風俗も異なり  
春も春の生産は  
倍すぬ人

世田國書卷三

骨片の遊園波邊の景



○瑞典能留英ハ一政府の支配かきど

情多國ハ富強也  
志一なり  
白耳義去るは北の  
方ゆき付く先、連  
國都は骨片波邊

も兩國自から其法律の瑞典王ハ毎年數箇月の間必能留英ハ行て其國事と治とを列とと瑞典ハ蒸氣車路少一旅行とハ道中筋の百姓よ馬を出させ三四里の宿次おて

とて玉中一の交易場  
濃戸以渡北瑞典  
西の隣に能留英西  
東のあま玉一合  
一玉玉西の都を鑑

人と乗せ荷物を送り  
て國法と



瑞典の都  
須德保  
留武  
王宮の  
圖

沈知屋奈東、沈徳  
保留武、其、省  
ぬ、敏、不、毒、以、地、不  
の、人、を、合、と、本、は、乃  
數、四百、三千、萬、北、地

○二百年以前まで  
ハ魯西亞も小國不  
て且北方の田舎國  
り、とバ學問も開け  
ぞ人氣暴くして殺  
伐か、う風倍り、を  
ガ千六百年代の末  
元祿年平土留帝と  
中の頃、英明の君出  
い、一、時、小國と改革  
く、一、時、小國と改革

の氣候寒く、  
閑け、北、稀  
かれ、と、女、穀、菜、実  
と、塔、山、より、出、る  
金額、中、小、鉄、は

英佛和蘭等の如  
き文明の國の風小  
あつひ學校と設け  
海陸軍と建て内と  
守て外と攻免歐羅  
巴諸國と並び立つ  
のそちふむ堂々た  
ろ一大國の基と開  
き今日小至るまで  
威名と世界中小夷

極ありて世界無類の  
名ありて  
次由保苗武元港よ  
東を帝國魯西亞の

か  
せ  
り

平土留帝



魯西亞の都ハもヤ  
ももあつひか處  
ちをーろ平土留帝  
の時ハ北方の海岸

都なる新都平土  
苗保苗府たり抑魯  
西亞の領分ハ亞細亞  
本利加歐羅巴三大陸  
と跨りて東西二子九百

一 新 都 開 闢  
 と 平 土 留 保 留 府  
 と 名 け 奈 和 とい  
 不 河 の 畔 小 河 ありて  
 當 時 ハ 歐 羅 巴 洲 中  
 小 数 少 少 大 都  
 會 々 々 々 但 一 寒  
 氣 ハ 甚 々 一 冬  
 の 間 ハ 河 氷 氷 氷  
 て 海 氷 氷 氷 氷 氷

余 皇 南 北 凡 一 万 里 世  
 界 凡 地 を 六 日 行  
 一 有 一 政 府 生 殺  
 皇 帝 一 人 凡 手 六 余  
 皇 帝 一 人 凡 手 六 余

と 往 来 甚 だ 盛 一



魯 西 亞 他 の 歐 羅 巴  
 の 景 観

萬 人 民 の 上 々 々 々  
 皇 帝 一 人 凡 手 六 余  
 皇 帝 一 人 凡 手 六 余  
 皇 帝 一 人 凡 手 六 余

巴諸國と違ひ立君  
獨裁といふ政事の  
立方小て國帝一人  
の思ひ通る勝手小  
事を捌く風かや故  
小下々の情合上小  
通ぜばして國中  
不平と抱く者多し  
さきども其國柄北  
方小偏りて外國の

懈たしり兵士の數  
を二千萬國に法たり  
設けたる八百九百の學  
校ふ九千五萬の校者  
古くより習ふる藝

敵と受るふと少な  
く且其武備格別小  
よく行届きたといひ  
外敵と受るも敗北  
せしむとあり既小  
安政元年英佛の大  
兵黒海より入らせ  
が長とがふといふ  
處と攻めしあやの  
まども敵味方五分

樹心次第王進心國  
の富と公たするる産  
物ハ五穀獸類草竹  
烟草字良田山林  
金銀銅鉄穀





人ハ自カク市中ト  
 焼拂ヒたまゴリ其  
 後マシク普請一テ却  
 以前ノ如ク奇麗  
 カヤ市中ノ寺院多  
 名代ノ鐘ハ高  
 二丈一尺重サ千  
 六百ト即チ我四  
 十三萬三千六百貫  
 目米小モ色バ一萬

鮮國以堺  
 雙頭の鶴  
 其成切を  
 急々には  
 心就る行



八百石余の重さか

のみ様を今  
 見ん難ん  
 見ん難ん







